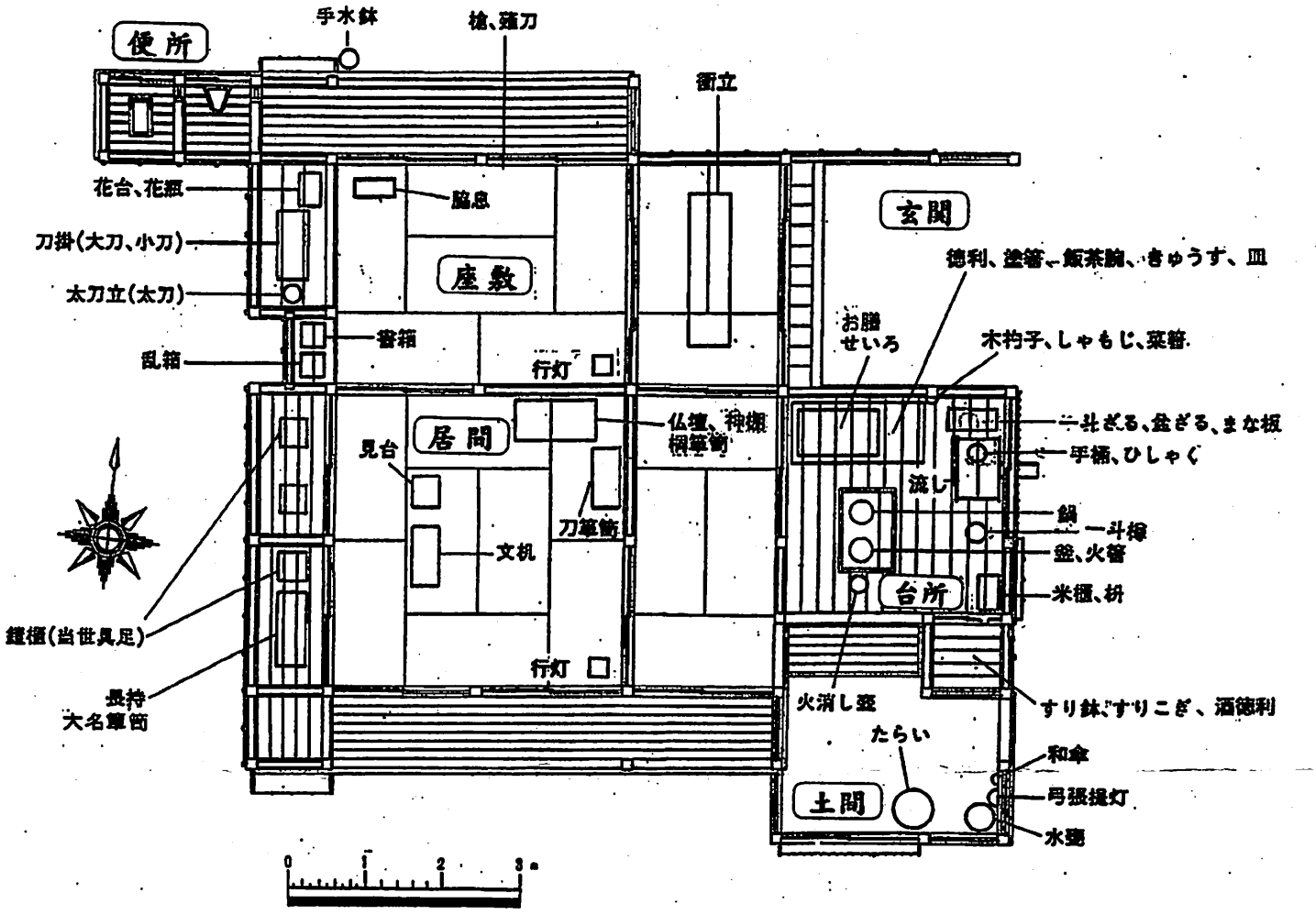
武家屋敷　展示配置図



玄関（げんかん）

間口の大きさは身分に応じて決められていました。玄関から座敷までの空間は客が使い，家人は，普段は土間から出入りしていました。

座敷（ざしき）

接客用の空間です。太刀，刀，槍，薙刀，脇息（ひじかけ），乱箱，書箱を展示しています。床の間は質素で，長押はついていません。

居間（いま）

文台，硯箱，見台が置かれ，書斎のように使われました。仏壇，神棚，桐の箪笥，刀箪笥，長持，大名箪笥を置いています。鎧櫃には当世具足という様式の鎧が入っていますが，これは甲冑試着の体験用で調度品ではありません。

土間（どま）

家族が使う内玄関です。水甕などが置いてあります。風呂場がないのでたらいを置いています。井戸の水を水甕にくんでおき，ひしゃくですくって手桶に入れて，流しで使いました。

台所（だいどころ）

板の間に、木の箱に土で築いた２口の移動式のかまどと高さの低い流しを置いています。床にひざをついて使っていたようです。天井は煙抜きのため、目透かし竿縁天井になっています。醤油などを入れた一斗樽や米櫃などがあり，戸棚にはお膳やせいろ，食器類を入れています。かまどを守る火の神様である荒神様をまつっています。

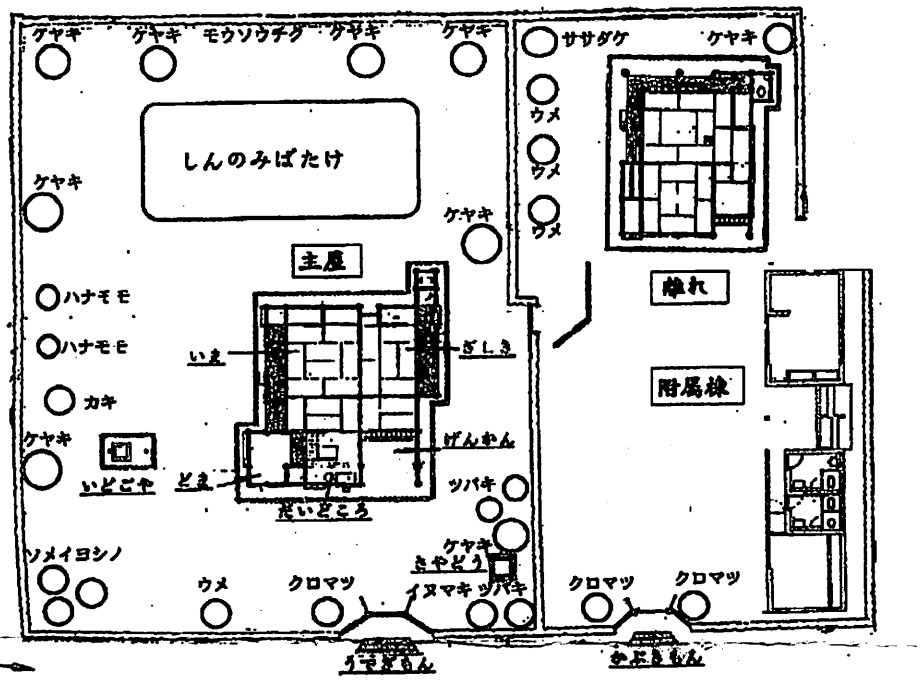
台所に続く部屋は食事や配膳に使用したと思われます。

※座敷や居間にある調度品の多くは佐倉藩士あるいは大多喜藩士が使用していたものを復元しました。そのほか推定で復元しているものもあります。

※屋敷の構造，間取りについては開館時点(昭和61年)の調査を元に再現しています。

武家屋敷

江戸時代に建てられた佐倉藩の中級武士の屋敷をモデルに再現しています。『慶応元年佐倉藩堀田氏分限帳』によると小納戸部屋番で 90 石取りの田島伝左衛門の屋敷であったことが記録に残っています。敷地は往来の馬上から屋敷をのぞかれないように道から一段高くなっており、生垣で囲われています。敷地内では主屋の他、井戸小屋、鞘堂（稲荷をまつる）、菜園も再現しています。敷地面積は 693 ㎡（220 坪）あります。



主屋

「玄関」「座敷」という居住空間と「居間」「台所」「土間」という居住空間を区別して配置する武家住宅の典型的な間取りとなっています。1833（天保４）年の藩政改革で新築の屋敷の規模や様式は身分によって細かく規定されました。屋敷の大きさは小屋敷に相当します。延べ床面積は 74.96 ㎡（24 坪）です。（詳しくは裏面をご覧ください）

菜園（汁の実畑）

汁の実になるような青菜などを植えていました。当時の武家屋敷の住人は 4～5 人で、畑を耕作する使用人の部屋はなく、近隣から通ってきていました。

腕木門

左右の親柱の上部に冠木が通され、親柱からはさらに前後に腕木が出ます。この腕木にのせた出し桁に垂木を掛けて屋根を付け、板扉か格子扉を設けた門です。

附属施設

中央の生垣を境に離れと附属棟があります。再現に際して特定のモデルはなく、離れでは「茶道」「野点」などの演目を行います。

千葉県立房総のむら